

## 第三回 GX2040リーダーズパネル

### 議事概要

日時：令和6年8月1日  
9：30～10：45  
於：官邸4階大会議室

1. 開会
2. 意見交換
3. 閉会

#### 配付資料

- 資料1 馬田隆明氏資料
- 資料2 名和高司氏資料
- 資料3 大橋弘氏資料
- 資料4 川島健氏資料
- 資料5 伊藤麻美氏資料
- 資料6 GX2040リーダーズパネルで得られた7つの課題（案）

#### 出席者：

- |        |                              |
|--------|------------------------------|
| 岸田 文雄  | 内閣総理大臣                       |
| 齋藤 健   | GX実行推進担当大臣兼経済産業大臣            |
| 林 芳正   | 内閣官房長官                       |
| 伊藤 信太郎 | 環境大臣                         |
| 馬田 隆明  | 東京大学産学協創推進本部 Found X ディレクター  |
| 名和 高司  | 京都先端科学大学 教授                  |
| 大橋 弘   | 東京大学 副学長・大学院経済学研究科教授         |
| 川島 健   | 株式会社ジャパンエンジンコーポレーション 代表取締役社長 |
| 伊藤 麻美  | 日本電鍍工業株式会社 代表取締役             |

<出席者からの発言概要>

- 脱炭素と経済成長を同時に達成するために、起業、研究開発、政策の3分野において、それぞれスピード、スケール、ストラクチャー（構造変化）の3Sを意識した政府の活動・支援が必要。
- スタートアップや研究開発の世界では、これまでのボトムアップ型からトップダウン型への変化が生じており、政策立案や執行面でもこれまでと違うやり方やミッション志向の体制を構築することが重要。
- 日米企業の成長格差の本質は、「スタートアップ」ではなく「スケールアップ」。日本企業は現場力こそ優れているが、経営変革力や、企業の成長エンジンとなる事業開発力や市場開拓力が低い。
- 政府は、倫理資本主義などの日本発のテーマ設定、PBR 2倍などの成長目標設定、安心など日本クオリティでしか担保できないプラットフォームを造るなど、国家戦略をバージョンアップさせる必要。
- 世界に求められる脱炭素の取組は過去に類を見ないほど野心的。国益を譲らないしたたかさが必須であり、産業界だけに頼ると多排出産業の空洞化が進み、世界全体での脱炭素の取組にも逆行。GX技術は開発・実装されれば加速的に炭素生産性が上がるので、無理に下に凸の目標を設定すると産業が海外に出るおそれ。
- GXを持続的な成長につなげるには、脱炭素への市場を意識して作り出し、需要家自らのGXへの行動につなげられるよう、政府の役割が重要。炭素に対する価格の適正化や脱炭素製品の公共調達・GX先導企業への購買推奨などが考えられる。
- 現行の電力システムにおける規律（脱炭素投資におけるアップサイドの利益還付や、需要家ごとの商品開発・販売を規律するなど）を再考し、脱炭素のための産業GX規制にそった規制に置き換えるべきではないか。
- 三菱重工船用機械エンジンの船舶用エンジン事業部門と神戸発動機が2017年に事業統合して誕生。
- 国際海運におけるGHG排出ゼロに向け、ゼロエミ船の投入が必須。これをビジネスチャンスと捉え、船舶用大型エンジンマーケットでのゲームチェンジに挑戦。真の脱炭素燃料であるアンモニアの選択というリスクテイクをしつつ、スピード感を持って大型設備投資を断行。これにより先行者利益を確保し、マーケットシェアの拡大を狙う。
- GXを担う中小企業にとって、良い人材の確保や、規制対応によって土地活用が難しくなるなどの影響がある。更には産業構造の変化により従来のサプライチェーンにも影響が出て、これまで入手できた薬品が国内で入手できないといった課題にも直面。

- エネルギーの安定供給は事業活動の根本。エネルギーミックスは必須であるとともに、最新式の設備・装置は安全性や省エネなどの工夫が組み込まれており、これは原子力でも同様。安全性を高め、改修・新設により原子力発電を有効活用していくべき。

#### <自由討議>

脱炭素技術や燃料、また企業支援などGX市場創造に関する有識者への質問があり、回答の概要は以下。

- 日本にはGAFAMのようなイニシエーター企業がない中、政府が主導していくことが必要。製造業で脱炭素化を進め、製品を国内やアジアに広げていかなければならない。政府が予算や公共調達を使って前向きに進めるべき。
- DAC（直接空気回収技術）を扱うクライメートテック企業は世界にも100社弱あり、日本でも出てきている。粒子を空气中に展開し太陽光を遮る技術も開発されているが、こちらはまだまだ進んでいない。
- 低炭素燃料としてLNGやメタノールがあるが、アンモニアや水素は脱炭素燃料。特にアンモニアは肥料として活用され流通が進んでいることもあり先行している。水素はこの次の位置付け。
- 日本のベンチャー支援について、近年は投資や税制など環境も改善されてきたが、ユニコーン、デカコーン企業を生み出すというアップサイドの想像力を高めていくことが必要。海外ではVC自ら研究開発を行い、短期間でユニコーン級に成長するGXスタートアップが生み出されている。
- GXなど現世利益にならない投資を「非財務」ではなく「未財務」として、将来財務化できるものだと考えてもらえるようなストーリーを浸透させていく必要がある。
- 中小企業すべてを支援の対象とするのではなく、信念をもってチャレンジしている企業に集中して支援することが重要ではないか。